



雪の八甲田  
(青森県所蔵／青森県史編さん資料)

「昨今、地球温暖化の影響なのか、青森でも以前と比較して冬の冷え込みが厳し」と感じるものが減り、夏には猛暑日が増えたと感じることがある。暖冬で雪かきの負担が減ることはありがたいものの、このような気候の変化が今後どのような影響を我々にもたらすのかについては若干の不安を感じ得ない。

さて、江戸時代中期から後半の期間にかけては、地球規模の気候変動では小氷期に当たり、世界的に年平均気温がそれまでと比べて若干低かった時期であった

という。

その日本における影響は、大きくは天明の大飢饉に代表されるように冷害による不作とそれに伴う飢饉の発生などとして現れたが、小さいものとしても、冬季に青森港が結氷するなど、現在では見られない現象が記録されている。このように海水すら凍るほどの厳冬によって、青森

も、その著作「谷の響」の中に、岩木山の氷雪取りが雪崩で遭難死する話や、暑中に魯仙の娘が購入して食べていた雪の中に怪しい虫がいた話を書き留めている。さらに明治2年の冬には、中川嘉兵衛という人物によって、青森から東京・横浜方面に向けた大規模な氷の輸出も試みられてい

る。商談を受けた瀧屋では、人夫を動員して堤川から500トンもの氷を切り出し、河口付近に集積して運搬のための船を待ち受けていた。だが、結局いかなる手違いによるものか春になっても船は現れず、氷も溶け出してしまったため試みは失敗に終わったのである。しかし、中川はこの失敗にもくじけず、翌明治3年には河津の任地であった函館から、五稜郭の堀の水を輸出することに計画を変更し、見事に事業化を成功させた。その後「函館氷」は天然氷のブランドとして東京や横浜で名声を博したのである。

## 売られる氷雪

### ―幻の「青森氷」―

石塚雄士

(県民生活文化課)

県史編さんグループ

県などの北国には毎年大量の雪や氷が天からもたらされてきたのだが、冷凍・冷蔵技術が存在しなかった時代にあっては、これらの雪や氷は十分な商品価値を有するものであった。

実際、夏季に岩木山の氷雪が弘前で販売されていたという記録がある。また、幕末の弘前で活躍した画師・国学者である平尾魯仙

であった。そのため中川は、水の国産化を目指して有望な産出地を探しており、協力者の一人であった河津祐邦という人物に、青森を紹介されたのであった。これは幕末期、幕府の箱館奉行所の役人であった河津が、任地箱館への往復の際、青森の廻船問屋、瀧屋と親交を結んでいた縁によるものであろう。

まさしくお流れとなった青森からの氷の輸出計画だが、もし当初の計画どおり輸出に成功していたならば、「青森氷」として、地域の特性を活かした製品としての地位を確立できたのではないだろうかとも思われ、若干の無念さを感じざるを得ないのである。